

## 「嘘みたいだが本当の話」

増山雄三

和歌山城の近くにある金龍寺へ、先日亡く  
なった女房の兄を、代々の墓に納めにいった  
とき、高校の歴史の先生をしている寺の住職  
から、江戸時代に古式捕鯨で栄えた、新宮市  
の「三輪崎」という漁師町に、中国風の立派  
な楼門が立っている「徐福公園」という公園  
があり、そこには、「徐福」という人物の墓  
があるというので出かけた。

新宮駅の観光案内所で貰ったパンフレット  
によれば、徐福は二千二百年ほど前、秦の始  
皇帝の命により、不老不死の霊薬を求めて、  
童男童女三千人を引連れ船出し、熊野の地に  
辿りつき、のちに熊野に永住し、農耕や捕鯨  
それに紙すき等の、技術を伝えたとある。  
それを見て私は、不老不死の薬を求め、秦  
の家臣が蓬莱へ旅をした話を、中学校の授業

で習った気もし、暫く忘れていたところ、先日、JAFの月例誌を見ていたら、京都府伊根町にある「新井崎」という漁師町に、「徐福渡来の地」という看板が立つ写真がでているのを見て驚き、図書館で調べてみた。

すると、町内の新井崎神社付近は、菖蒲や黒節ヨモギなどの薬草が自生しており、徐福はこれを見て、不老不死の妙薬を探し当てたと喜んだが、村人に慕われていたので、故郷に帰らずそのまま村に残ったあと、近隣で麻疹が流行ったとき、村長が彼を新井神社に祀ると、多くの人々が救われ、今も同神社には、徐福が祀られている事が分った。

そのほか、日本各地には、南は鹿児島から北は青森までの八カ所に、徐福ゆかりの伝承が残されており、特に、三重県熊野市波田須町には「徐福ノ宮」があり、彼が持参したすり鉢をご神体とするほか、佐賀市にある伝承では、同市の金立山に徐福が発見したとされる、「フロフキ」という葵科の植物が自生し

ていて、地元では「不老不死」が訛ってフキといい、根や葉を使って「咳止めの薬」として利用されている。

ところで、この徐福という人物は、秦の方仕をしていたとき、始皇帝に「東方の三神山（蓬莱、方丈、温洲）に長生不老の霊薬がある」と奏上し、始皇帝の命を受けて、若い男女や多くの技術者を従え、財宝や財産それに五穀の種を持って、紀元前二一九年に、河北省秦皇島から東方に向け船出した。

それでも、肝心の始皇帝は、彼が出立した後すぐ崩御してしまったため、途中、現在の韓国济州島西帰浦や半島の西岸に立ち寄り、「蓬莱（日本の呼称）」に到着後、領地をえて王となって、秦には戻らなかったと、「史記」の淮南衝山列伝に描かれている。

一方、中国の江蘇省金山鎮では、古くから「徐福村」と呼ばれる村があり、そこでは、徐福にまつわる伝承や遺跡があり「徐福記念館」も開館し、多くの日本人観光客が訪れて

いるというが、そこには「徐福小学校」まで開校され、校門にある校名の揮毫は、自らを徐福の末裔と主張する、日本徐福協会名誉会長で元総理の、「羽田孜」によるものというのは、「嘘みたいだが本当の話」である。

令和二年十月